



Title	換喻と述定：内の換喻における流動的な名詞句解釈のヴァリエーションと成立可否の観点からみた
Author(s)	大田垣, 仁
Citation	語文. 2010, 94, p. 44-56
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/69153
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

換喻と述定

——内の換喻における流動的な名詞句解釈のヴァリエーションと成立可否の観点からみた——

大田垣 仁

一はじめに

最も広い捉え方からすれば換喻（メトニニー、metonymy）とは「ある事物をそれと密接に関連した別の事物で表す比喩」と定義できる。以下の（1）の例はいずれも名詞句の位置、すなわち名詞句の内部に換喻が現象している。これを大田垣（二〇〇九c）では「内の換喻」と規定し「外の換喻」として規定した慣用句や間接発話行為などの名詞句の外部に換喻が現象するものから区別した。後述するが、一見同じようにみえる以下の例は異なる成立のメカニズムをもつており、いくつかの類型に分けることができる。

- (1) a カツ丼がくいにげをした。（飲食店で）
 b 昨日は鍋をたべた。
 c 漱石は三番目の棚にある。
 d 宮内庁が官邸と対立した。

e ヤカンが沸騰した。
 f ブッシュがイラクを爆撃した。

筆者はこれまでに、従来の研究でひとしながら扱ってきた名詞句の位置に生じる換喻表現について、その質的な相違を明らかにしてきた（大田垣二〇〇九a,b,c、大田垣・清田二〇〇九）。本稿では、そこでさしだされた換喻の下位区分が、従来の換喻研究（佐藤一九七八、深谷・田中一九九六、瀬戸一九九七、篠原二〇〇二）でしばしば議論されてきた「換喻の流動性」（換喻における流動的な名詞句解釈）にどのように適用でき、そこからどのような新たな知見をさしだせるかについて述べたい。

一・一 問題の背景

一・一・一 換喻における流動的な名詞句解釈についての先行研究
 本稿で扱う「換喻における流動的な名詞句解釈」とは、同一の名詞について、換喻によって表される対象が文脈や述語によって

変化する現象のことをいう。この現象について議論した代表的な先行研究として佐藤（一九七八）、瀬戸（一九九七）、國廣（一九九七）があり、そこでは換喻における流動的な名詞句解釈は、おむね次のような現象として説明されてきた。

（2）正月早々、よからぬことをするものがる。隣村の駐在から、正月賭博をあげるから手伝つてくれと通電があつた。

強い西風を突いて自転車を走らせて行くと、隣村の駐在には、応援に來た仲間が五六人集まつてゐた。

（井伏鱒二『多基古村』）

「隣村の『駐在』から……通電があつた」という文のなかの「駐在」の部分の実情は、決してあるひとつの具体的な物（人間あるいは建物）のかわりに抽象名詞が代置されているという割り切れた現象ではない。じつはそこには、三つの（しいて三つに分類すれば三つにかぞえられる）イメージが、ほとんど優劣なしに共存し、流動しているのだ。
1・駐在という任務、2・駐在している巡査、3・巡査の勤務する家屋としての駐在所、という三つであり、それらが分離しながら溶解し合い、私たちの意識の遠近法のなかに流動している。（……）かりに三つにかぞえてみたその三者のうちのどれがどれに代入されているかという関係は、まさに三つどもえで、単純な公式で定着できるわけはない。ここでは私たちの意識そのものが換喻的な存在なのだ。

（佐藤一九七八・一三〇—一）

（3）あのすし屋は（うまい／無愛想だ／さわがしい）。

この例は、入れ物に対する中身が一義的に定まらず、述詞（「うまい」など）によって中身が異なる場合があることを示す。

（瀬戸一九九七・一八八）

（4）（1）岡の上に松林に囲まれて学校が建つてゐる。

（建築物）

（2）学校を卒業してから十年になる。（制度）

（3）流感が猛烈にはやつて、ほとんど学校全体がやられた。

（学生の身分）

（4）学校は八時にはじまる。（授業）

（5）私は学校時代はよく映画を見に行っていました。

（学生の身分）

この諸用法は、丸ごと捉えた「学校」というもののあ
る一面に焦点を当てたものと言うことができる。（……）
「学校」の場合には、右に挙げた五つの意味のどの一つを使
われたときでも、その裏では他の意味がすべて生きている。
逆に言うならば、他の意味がすべて生きていて裏から支え
ていてくれないと、どれ一つとして存在し得ない、という
関係にある。

（國廣一九九七・五八一九）

以上の説明から、「ある種」の名詞句の位置に生じる換喻には、
その指示のあり方に流動性がみられることがわかる。ここで問題
となるのは、あらゆる名詞句の位置に生じる換喻でこのような流

動的な名詞句解釈が成立するのか、という点である。

一・一・二 先行研究における換喻の概念構造の二つの捉え方

次に、代表的な先行研究で換喻成立の原理がどのように説明されたかを確認する。これには大きく分けて二つの捉え方がある。一つは以下の図1に示す、Langacker (1993, 1995) に代表される参照点構造モデルによる説明である。参照点構造モデルとは主体 (C) がある目標物 (T) について言及したいが直接それに言及することができない場合、まず知覚しやすいもの (R) を参照点として設定し、その参照点を介して知覚しにくい対象に心的にアクセスするという考え方である。例えば「ヤカンが沸騰する」という換喻表現ではヤカンを参照点として、目標であるヤカンの内容物へ心的アクセスがおこなわれていると考える。

そして換喻成立のメカニズムのもう一つの捉え方は、Croft (1993) や西村 (二〇〇四) に代表される領域焦点化の考え方である。領域焦点化とは、ある名詞がもつ総体的な知識のなかからその文脈で問題となる概念が述語によって選択されうるという考え方である。例えば(4)の「学校」を例にとれば、図2のように図式化することができる。

- c b
5 a
- 換喻現象を領域焦点化でとらえる説は、役割転移（後述）の考え方の一部に対応しているが一部でしかない。
また名前転送の説明にはつかえない。

図1 参照点構造
(reference-point construction)

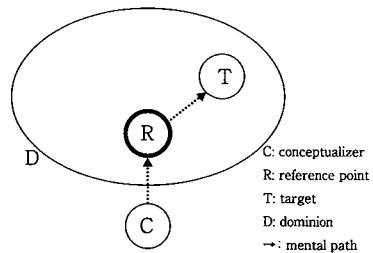
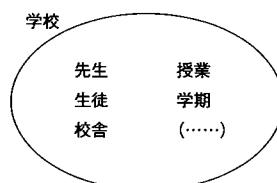


図2 領域焦点化 (domain highlighting)



以上の問題に対し本稿では「名前」という概念を導入し、名詞

句の位置に生じる換喻に本質を異にする下位類があることを示す。

その特徴について概観していく。

一・二 本稿で主張すること

以上を問題の背景として、本稿では次の問題について検討する。

(6) a 内の換喻(名詞句の位置に生じる換喻)にはどのような

なヴァリエーションがあるのか?

b 内の換喻において流動的な名詞句解釈が成立するもの

には何があるのか?

結論として、内の換喻にいくつかの下位類があるなかで、流動的な名詞句解釈は疑似役割転移という類型の枠内で生じることを述べる。

二 内の換喻とその下位類

ここでは、内の換喻にどのようなヴァリエーションがあるかについて確認する。大田垣(二〇〇九c)では、内の換喻の類型として次の(7)のような分類を示した。

(7) 内の換喻の類型・大田垣(二〇〇九c)

名前転送型 [臨時的な名づけ / 語彙化した名づけ]

内の換喻

指示的換喻

役割転移型 [真性 / 疑似]

非指示的換喻(介在性の他動詞文の主体の位置)

以下では、この枠組にそって、内の換喻のヴァリエーションと、

二・一 指示的換喻について

最初に、内の換喻の下位類のひとつめとして、指示的換喻について概要を述べる。指示的換喻は次のように定義される。

(8) 文中の名詞句の位置に生じ、語用論的関数によって、その

名詞句の指示対象や意味が字義どおりのものから密接に関連する別の事物にずれるもの。指示的換喻には名前転送型と役割転移型とがあり、トリガー・ターゲット間ににおける名前の転用の有無によって両者は本質を異にする。

(大田垣二〇〇九a)

ここでいう、トリガーとは換喻によって表すものであり、ターゲットとは換喻によって表されるもののことである。また、語用論的関数とはトリガーとターゲットを結ぶ動機づけとなる心理的・社会的な関係性のことである。例えば「漱石をよむ」という例の場合、トリガーは作家としての夏目漱石であり、ターゲットは漱石が書いた著作物である。この二つが「作家が作品を生み出す」という語用論的関数によって結ばれており、そのことによつて換喻的な名詞句解釈が可能になると考えることができる。

二・一・一 名前転送型の指示的換喻について

指示的換喻の二つの区分において、まず名前転送型は次のように定義される。

(9) 「名づけ」というひとつ出来事である。限定された状況⁽³⁾においてトリガーとターゲットの間に何らかの語用論的関

数が成立するとき、トリガーの名前をターゲットの名前として転送する名詞句解釈である。結果としてターゲットを

トリガーの名前で呼ぶことができる。

次の(10)に示すように、名前転送型の指示的換喻には「臨時的な名づけ」と「臨時の名づけが語彙化したもの」とがある。

(10) a (飲食店で店員が) カツ丼 (＝を注文した客) がくい

にげした!

b 昨日は鍋 (＝鍋料理) をたべた。

「臨時の名づけが語彙化したもの」

金水(一九九〇)によれば「という」「とよばれた」「とよばれる」といった表現を用いてトリガーとターゲット間における名前の

転用の有無をテストすることができる。「という」は名詞の役割と名前を分離し、本来の名前にしか使えない。「とよばれた」は一回的なおよび名を役割と結びつける。「とよばれる」は一般化したおよび名を役割と結びつける。ここでいう「役割」とは Fau-

connier (1985) の用語であるが、名詞句が表す内包をもったカテゴリのことである。このテストを用いると、臨時の名づけの例ではトリガーとターゲットを「とよばれた」で結ぶことができき(『カツ丼』とよばれた客)、臨時の名づけが語彙化した例ではトリガーとターゲットを「という」「とよばれる」で結ぶことができる(『鍋』(という)とよばれる)料理)。このようなテス

トを適用することによって、名前転送型の指示的換喻では、トリガー・ターゲット間で名前の転用が生じることを観察できる。

名前転送を実際にひきおこす語用論的関数としては、次の

(11) a 所有物の名前をもちいた所有者への名づけ

b 構造物の構成部分の名前をもちいた本体への名づけ

c 場面を共有する物や場所の名前をもちいた対応物への名づけ

d 出来事の構成要素の名前をもちいた出来事への名づけ

まず「所有物の名前をもちいた所有者への名づけ」として次の(12)をあげる。所有物には分離不可能所有物

とが考えられる。

(12) a 「分離不可能所有物」正午ちかく、警察のひとが二人、

葉藏を見舞つた。(……) ひとりは短い口ひげを生やし、ひとりは鐵縁の眼鏡を掛けてゐた。鬚は、聲をひくくして園とのいきさつを尋ねた。

(道化の華)

b 「分離可能所有物」例の眼鏡が(……) 黒板の字を凝視している。

(若き数学者のアメリカ)

次に「構造物の構成部分の名前をもちいた本体への名づけ」として次の(13)をあげる。

(13) そう云えあはの仏蘭西窓の外を塞いで、時々大きな白帆がありすぎるのも、何となくもの珍しい心もちで眺めた覚えができる(『鍋』(という)とよばれる)料理)。このようなテス

(開化の良人)

次に「場面を共有する物や場所の名前をもちいた対応物への名づけ」として(14)をあげる。

(14) a 一四卓さんおかえりです

(飲食店にて)

b 博多がめんたいこを送ってきたよ。 (田窪一九九二)

次に「出来事の構成要素の名前をもちいた出来事への名づけ」としての次の(15)をあげる。特定の事件の首謀者、事件の柱となる物、事件がおきた場所、事件がおきた日付などの名前がその事件の名前として転用される。

(15) a ファンドが姉歯 (＝姉歯元建築士による耐震偽装事件) に怯える理由

(日経ビジネス・一〇〇六年一〇月五日)

b 天麩羅蕎麦 (＝を好んで食べていた坊っちゃんを生徒たちが揶揄した事件) もうちへ帰って、一晩寝たらそんなに癪癥に障らなくなつた。 (坊っちゃん)

c 「ヒロシマ、ナガサキを普遍化したい」と(……)市立大広島平和研究所の水本和美助教授は強調する。

(中国新聞・一〇〇三年七月三〇日)

d 「ハイジャックできない飛行機」は新たな9・11を防げるか? (ロイター・一〇〇六年八月一一日)

二・一・二 役割転移型の指示的換喻について

次に、指示的換喻の二つの区分において役割転移型は次のように定義される。

(16) ある名詞句解釈において、その名詞があらわす役割が、その名詞がもつ百科事典的な知識を背景として関連する別の

役割に移る名詞句解釈。

役割転移型の指示的換喻の特徴は、トリガーとターゲットを「という」でも「とよばれる」でも結びつけられないことである(以下、不自然な文解釈をとる例文には「*」をつけ、不自然とまではいかなくとも容認度が下がる例文には「?」をつける)。

(17) *『漱石』(という／とよばれる)書物。

この点からみて、役割転移型の指示的換喻ではトリガー・ターゲット間で名前の転用が起きないことが観察される。

次に、役割転移を実際に発動させる語用論的関数について述べる。役割転移における語用論的関数は、次の(18)に示すような、われわれがもつ抽象化された一般的知識の束である。

(18) a 個体の構造についての知識

b 事象の構造についての知識

c 組織や集団についての知識

d 人間の意図的行為についての知識

まず「個体の構造についての知識」にもとづいて役割が〈本体〉から〈その本体の構成部位〉に転移する例として、次の(19)のような例がみられる。

(19) 真紀子は小卓の方へ立っていって薔薇を折ると、(旅愁)

この他にも、この種の役割転移には、次の(20)の〈容器〉から〈中身〉への転移や(21)のような〈メタフォリカルな容器⁽⁵⁾〉か

から、その「中身」への転移がある。

(20) 鍋を煮立たせて、ゆでだこを売っている男がいました。

(先生への通信)

(21) 礁の半ば辺りで、すぐ下の海が泡立って浅瀬になっている場所で、彼は慎重に準備をした。
(漁家のひと)

次に「事象の構造についての知識」による役割転移について、

(22) のような「自然現象そのもの」から「自然現象の構成要素」に役割が転移する例が考えられる。

(22) 雨(=雨粒)が屋根を打つ音も聞こえた。(世界の終わり)

次に「組織や集団についての知識」による役割転移について考える。この類型として(23)のような、役割が「組織」から「その組織の責任者」に転移する例がある。

(23) 農林水産省と厚生労働省は二六日、未通関の米産牛肉の輸入手続きを一七日に再開することを正式発表した。
(NIKKEI NET・二〇〇六年一〇月二六日)

このタイプのより意味の広い例に、場所からその場所に存在する集団への転移がある。

(24) a 村は寒気の底へ寂靜まっていた。
(雪国)

b その瞬間、スタンドがどよめいた。

(福山エース・二〇〇六年一一月三日)

c 御堂筋はこんな日も一車線しか動かない

(大阪 Lover)

最後に「人間の意図的行為についての知識」による役割転移に

ついて考える。このタイプの役割転移として「制作関係」が考えられる。制作関係には次の(25)のような「作者」から「その作者の作品」への役割転移や(26)のような「歌手」から「その歌手の楽曲」への役割転移がみられる。

(25) a 布団にもぐりこみ(……) 夏目漱石を読んだ。

(太陽の塔)
b ロートレック、ミュシャ、カッサンドルなど一五〇〇点を超える世界の秀作ポスターを所蔵しています。

(26) 渡辺はま子、東海林太郎、藤山一郎なんかをおやじがよく聴いていた。
(水木サンの幸福論・一二一五)

また、(27)のようにいわゆる法人がトリガーとなることもあります。

(27) やはり、サントリイに限る、サントリイを飲むと、他の酒はまずくて飲まれん、(……)

(春の枯葉)

二・一・二・一 役割転移におけるトリガーの選択制限

さらに、大田垣(二〇〇九a)では、役割転換型の指示的換喻の特徴としてトリガーに選択制限があることを指摘した。

「人間の意図的行為」による役割転移では、トリガーは固有名詞しかとれない。

(28) 激石が棚の上にある。/*作家が棚の上にある。

「組織や集団の知識」による役割転移では組織ではトリガーに

裸の普通名詞は使いにくい。

(29) 厚生労働省がと発表した。／?役所がと発表した。

单なる集団の場合トリガーは有名詞でも普通名詞でもよい。

(30) 御堂筋が渋滞している。／道路が渋滞している。

「事物の構造についての知識」による役割転移ではトリガーは普通名詞が選ばれる。
(31) 鍋がにえる。／? [ティファール]／有田) がにえる。

二・一・二・二 複合的換喻表現と役割転移の二つの区分

このトリガーの選択制限に関連して、役割転移型の指示的換喻は複合的換喻表現（大田垣・清田一〇〇九）というテストフレームを用いることで、さらに「真性」のものと「疑似」のものに分けることができる。ここでいう複合的換喻表現とは、次の（32）に示すような、換喻が現象している名詞（ターゲットよみ）を主名詞とした関係節に、字義通りの名詞句解釈（トリガーよみ）を促す述語を繋ぐことで実現するテストフレームのことである。

(32) 「ターゲットよみ／トリガーよみ 主名詞」述語。

そして次の（33）に示すように、真性役割転移とは、トリガーが固有名詞で、複合的換喻表現を作った場合に文全体が不自然な意味になるものである。また、疑似役割転移とは、トリガーが有名詞または普通名詞で、複合的換喻表現を作っても文全体の意味が不自然にならないものである。
(33) a *一二点展示されているロートレックは足が不自由だっ

た。

〔真性役割転移〕

b 沸騰しているヤカンをひっくり返した。

〔疑似役割転移〕

二・一 非指示的換喻について

最後に、内の換喻のもう一方の下位類として非指示的換喻について概要を述べる。非指示的換喻とは次のようなものである。

(34) Lakoff and Johnson (1980) で〈支配者で被支配者をあらわす〉メトニミーとして挙げられ、また、佐藤(一〇〇五)で介在性の他動詞文⁽¹⁾とされているもの。非指示的換喻は介在性の他動詞文の主体の位置に生じる。語用論的には

ターゲットの存在が含意されるがその存在はきわめて希薄である。
(大田垣一〇〇九c)

非指示的換喻の例として次のようないのがあげられる。

(35) a 太郎が背広をつくった。(「太郎が仕立て屋に背広をつくれさせた」という解釈)

b ブッシュがイラクを爆撃した。

c 本願寺第十五世常宗主のとき、浪華の門徒高木宗賢が淨財を喜捨して(……)本学を建てた。(金閣寺)指示的換喻と非指示的換喻との違いは次節で詳述する。

三 内の換喻におけるターゲットと述定との対応について

ここからは、指示的換喻と非指示的換喻の違いを明らかにする

ために「述定」という概念を導入した分析をこころみる。結論として、指示的換喻と非指示的換喻との違いが、名詞句に対する述定のありかたの違いであることを述べる。

三・一　述定について

分析にあたって、井元(=1001)で示された「述定」という道貫だてを援用する。

(36) 述定とは、言語によるあらゆる属性付与のことである。典型的には動詞句によるものであるが、名詞句や形容詞句による属性の付与もこれに含まれる。

(井元)1001・1(五)

実際の文においては、述定とは、換喻が生じる名詞句に対しても語が担う働きであるが、先に示した複合的換喻表現でみられたような、関係節において動詞句などによって主名詞に対して行なわれる属性の付与も本質的には同様の働きであると考える。

以下の分析では、述定がトリガーとターゲットのどちらに「対応」しているかを検討する。例えば「カツ丼が食い逃げした」という表現では、換喻が介在することで名詞句が指示示すものがトリガーである「カツ丼」からターゲットである「カツ丼を注文した客」にずれており、述語「食い逃げした」が実際に述定によって属性を付与しているのはターゲットの方であることがわかる。

三・二　指示的換喻と述定

指示的換喻では当該の名詞句に対して述定はターゲットに対応する(以下、例文末の括弧内に述定の対応先と指示対象を示す)。まず、名前転送型の指示的換喻では、述定はターゲットに対応している。

(37) a カツ丼がくいにげをした。

〔述定・ターゲット(=客)〕

b 昨日、鍋をたべた。〔述定・ターゲット(=鍋料理)〕

次に、真性役割転送型の指示的換喻では、述定はターゲットに対応している。

(38) a 濑石が三番目の棚にある。

〔述定・ターゲット(=漱石の著作物)〕

b 昨日サントリリーをのんだ。

〔述定・ターゲット(=サントリリー製のお酒)〕

最後に、疑似役割転送型の指示的換喻では、述定はターゲットに対応していると考えられるが、その存在が希薄である例がみられる。この問題については本稿では直接的に議論することはできないが、ターゲットが個体であるか否かということが関連していると考えられる。詳細な分析については別稿に譲りたい。

(39) ヤカンが沸騰している。〔述定・ターゲット(=中身)〕

(40) 雨が屋根をうっている。

〔述定・ターゲット(=雨粒・希薄)〕

(41) 厚労省が「」と発表した。

(42) 御堂筋が渋滞している。
〔述定・ターゲット（＝責任者・希薄）〕

b 非指示的換喻：述定がターゲットに対応していない。

〔述定・ターゲット（＝自動車・希薄）〕

四 内の換喻における流動的な名詞句解釈の成立可否

三・三 非指示的換喻と述定
一方、非指示的換喻では問題となる名詞句にに対して述定がターゲットに対応していない。

(43) ブッシュがイラクを爆撃した。〔述定？〕

これは一見してわかりにくいが、次のようなターゲットよみとなる二つの文を組み合わせた文によって確認することができる。

(44) * イラクを爆撃したブッシュが撃墜された。

この例において、Lakoff and Johnson (1980) が指摘するような（支配者で被支配者をあらわす）関係が成立しているとすれば下線部の表現のターゲットとして実際に爆撃を行なった戦闘機が想定されてもおかしくない。しかし、(44) ではそれに対応する「撃墜された」という述語をさらに繋ぐことができない。すなわち、非指示的換喻では換喻が現象した状態であっても問題となる名詞句の指示対象は変わらないと考えられる。

四・一 名詞句解釈にターゲットの流動性が生じるもの
まず、次の(46)のように、疑似役割転移の類型では当該の名詞のもつ百科事典的な知識の許す範囲でターゲットが流動することができ、それをひとつ文（複合的換喻表現）で表現できる。以下では、括弧内に複合的換喻表現によって導き出される流動しうるターゲットを示す。

(46) a 「ス」と発表した厚労省は霞ヶ関にある。

三・四 内の換喻におけるターゲットと述定との対応のまとめ

以上、名詞句に対する述定の対応のあり方が異なる点から、指示的換喻と非指示的換喻は次のように区別されることがわかる。

(45) a 指示的換喻：述定がターゲットに対応している。

- b 渋滞している御堂筋は大阪にある。（自動車↔車道）
- c 沸騰しているヤカンをひっくり返す。（中身↔容器）

四・二 名詞句解釈にターゲットの流動性が生じえないもの

一方、以下に示す名前転送・真性役割転移・非指示的換喻の類型では、同じ名詞句の位置に生じる換喻であっても、疑似役割転移の例でみられたターゲットの流動は生じない。

まず、次の(47)に示すように、名前転送型の指示的換喻は、そもそも「名づけ」という出来事であるために、トリガーとなる名詞はターゲットの名前の由来として用いられるはしても、トリガーとターゲットはそれぞれ独立した存在である。そのために、複合的換喻表現が成立せず、問題となる名詞句でターゲットの流動は生じない。

(47) a * くいにげしたカツ丼は出汁がききすぎていた。

b * 昨日たべた鍋は粘土でできていた。

次に、(48)に示すように、真性役割転移では複合的換喻表現が成立せずターゲットの流動は生じない。

(48) a * 三番目の棚にある漱石は明治の文豪である。

b * 昨日飲んだサントリーは大阪にある。

最後に、次の(49)に示すように非指示的換喻の例では、複合的換喻表現は成立する。

(49) イラクを爆撃したブッシュは一〇〇〇年から一〇〇八年までアメリカ大統領を務めた。

しかし、この複合的換喻表現の成立は名詞のターゲットの流動を示すものではない。なぜなら非指示的換喻ではそもそも述定がターゲットに対応していないからである。次に示す(44)で行

なった換喻が現象した二文をつなぐテストを再び確認されたい。

(50) * イラクを爆撃したブッシュが撃墜された。(44再掲)

このテストは、換喻が現象した状態であっても名詞句の指示対象が変わらないことを示すものであった。したがって、(49)の複合的換喻表現はトリガーであるブッシュ元大統領について言及しているだけで、ターゲットはそもそも問題とならない。

四・三 真性役割転移と疑似役割転移の境界と流動性の成立可否

以上、換喻が介在した名詞句解釈におけるターゲットの流動性の成立可否について述べた。名前転送型の指示的換喻が名づけ行為であり、非指示的換喻がそもそも流動すべきターゲットをもつていない換喻表現であるとすれば、換喻におけるターゲットの流動性が生じるか否かの境界は、真性役割転移と疑似役割転移との間にあると考えられる。そこで最後に、真性役割転移と疑似役割転移との本質的な違いについて述べる。

まず、疑似役割転移ではターゲットとなりうるそれぞれの知識が有機的に結びついて先の図2で示したようなひとつつのネットワークを作っている。そこではまず、当該の名詞をきっかけとして、ネットワーク全体がトリガーとして活性化される。そして、そこからさらにそのネットワークの一部分に注目する、つまり述語がターゲットを述定することが可能となる。

一方、真性役割転移では百科事典的な知識を借りてターゲットはトリガーと結びつけられているが、個体として独立している。

これは例えば「漱石をよむ」という例の場合「作家が作品をうみだす」という関係性を借りて漱石のそれぞれの作品は作者である漱石本人と結びつけられているが、それらはあくまで独立した個々の作品、すなわち個体であり、これらが集まって「漱石の作品」という単一のカテゴリーを作りはしても、疑似役割転移のターゲットが作るような相互に活性化しあう有機的な知識のネットワークは作らない。この点において両者は同じ役割転移であっても全く別の関係性（真性と疑似）であり、真性役割転移では疑似役割転移にみられるような流動的なターゲットの切り替えが生じないと考えられる。

五 おわりに

以上、本稿では換喻が介在した流動的な名詞句解釈の成立可否を明らかにするために次のことを示した。

まず内の換喻（名詞句の位置に生じる換喻）の類型として指示的換喻（名前転送型・真性役割転移型・疑似役割転移型）と非指示的換喻があることを示した。

次に、流動的な名詞句解釈が疑似役割転移型の指示的換喻の枠内にのみ生じることを述べた。

今後の課題として、換喻表現におけるターゲットの個体性とターゲットの希薄性との関係、さらにターゲットの個体性と換喻らしさとの関係について分析を精緻化させていきたい。

注

- (1) 「入れ物」は換喻が表すもの、「中身」は換喻によって表されるものである。
- (2) Fauchonier (1985) 参照。
- (3) ただし、名前転送が語彙化したのちはこのかぎりではない。
- (4) 詳細については大田垣(二〇〇九b)を参照。
- (5) 自然物などが容器に見立てられたもの。
- (6) 「個体の構造」と「事象の構造」を一括して「事物の構造」とした。
- (7) 実際には存在する被使役者の存在と行為の過程を無視し、あたかも主語自身が一人で事態の全過程を行ったかのように述べる他動詞文(佐藤二〇〇五・九八)
- (8) このような非指示的な換喻で文の動作主体と述定との不一致が生じる現象について、杉本(一九九九)は「集合論に基盤を置くモデル理論的対象物としては表現できない類いのものである」とし、メンタル・スペースとイメージスキーマをあわせた図式を用いた分析を試みている。

参考文献

- 井元秀剛(二〇〇一)「メンタルスペース理論における定名詞句の指示について」「言語における指示をめぐって」(言語文化研究プロジェクト一〇〇〇)、二一一三五、大阪大学
大田垣 仁(二〇〇九a)「名詞の閑散的な側面からみた指示的換喻の二つのタイプ—名前転送と役割転移』『KLS』二九、二三一
三三、関西言語学会
(二〇〇九b)「指示的換喻と意味変化—名前転送における語彙化のバターン」『日本語の研究』(五一四)、三一一四六、日本語学会

— (1990) 「換喻における指示と非指示—役割転移型の指示的換喻と非指示的換喻の境界かみた」『日本語学会第100回年度秋季大会予稿集』、八七一九四、日本語学会

大田垣 仁・清田朗裕 (1990) 「複合的換喻表現を用いた指示的換喻の下位区分の曖昧性排除は「ト」—役割転移型の指示的換喻を中心とした」『日本語文法学会第100回大会発表予稿集』、一一〇—

二七、日本語文法学会

金水 敏 (1990) 「役割」は「て」の覚書」『いんざの饗宴—覧壽雄教授還暦記念講集』、三五一—六一、へねこね出版

國廣哲彌 (1997) 『理想の国語辞典』 大修館書店

佐藤信夫 (1990) 『自動詞文と他動詞文の意味論』 風間書院

篠原俊吾 (1990) 「換喻と形容表現」『ノトリック連環』、一〇九

—「K」、成蹊大学文学部文学会編、風間書房

杉本孝司 (1999) 「メトリー」—の非指示的側面に関する覚書

瀬川賢一 (1997) 『証識のノトリック』 海鳴社

田窪行則 (1991) 「かうじんが食ひ逃げをした」〈語用論的閑数と同定原則〉『証語』、一八—三一、大修館書店

西村義樹 (1990) 「換喻の証語学」『ノトリック連環』、八五一—〇八、成蹊大学文学部学系編、風間書房

深谷弘・田中茂範 (1990) 『ノトリック』〈意味の証語〉—日本証語の生と死の』 風間書店

Croft, William (1993) The role of domains in the interpretation of metaphors and metonymies, *Cognitive Linguistics* 4-4, 335-370.

Fauconnier, Gilles (1985) *Mental Spaces Aspects of Meaning Construction in Natural Language*, Cambridge, Mass.: MIT Press.

Rev. ed. New York: Cambridge University Press.

Lakoff, George and Mark Johnson (1980) *Metaphors We Live By*, University of Chicago Press.

Langacker, Ronald W. (1993) Reference-point constructions, *Cognitive Linguistics* 4-1, 1-38.

— (1995) Raising and transparency, *Language* 71, 1-62.

用例出典

青空文庫：芥川龍之介『閑化の故人』／太宰治『道化の華』『春の葉』／寺田寅彦『先生への通信』／夏田漱石『坊やねやね』／横光利一『旅愁』

新潮文庫の100周年（CD-ROM版）：川端康成『雪国』／北杜夫『楓家のひと』／藤原正彦『和歌数学者のアメリカ』／川島由紀夫『金閣寺』／村上春樹『世界の終わらへー』ボイル＆ワンダーランス

その他：水木しげる『水木サンの幸福論』／森見登美彦『太陽の塔』

ウェブサイト：日経ビジネスオンライン（business.nikkeibp.co.jp）＼歌ネット（uta-net.com）＼チャム（チャム）大保山（suntory.co.jp/culture/smt）＼ロイター（jpr.reuters.com）＼NIKKEI NET（nikkei.co.jp）＼『福岡』（fuchu.or.jp）＼『中國新聞』（chugoku-np.co.jp）

（おおたがわ・やよい） 本学大学院博士後期課程